

## 高校生の部 最優秀賞

鮮烈な愛のことば

立命館高等学校 2年 左藤 海帆

## 作品名『三四郎』

選んだ一行 あなたに会いに行っただけです。

「あなたに会いに行っただけです。」ただただ自分の純粋な気持ちを綴った、私の心に深く突き刺さった言葉である。今まで度胸が無く、美禰子との距離感を掴みかねているような態度を取り続けていた三四郎が、初めて自分の素直な気持ちを伝えた場面のようにも思えた。私は、そんな三四郎の言葉に美禰子への愛の一部分を共有したような気さえした。

三四郎は、田舎から出てきて訪れた東京に戸惑っているように見えた。めまぐるしく道を走る電車に、忙しなく動き回る人の波。そして何より、そんなものにまるで頓着せずただ自分の思うままに生きる人々に、憧れていた都会とは違うものを見出したように思える。そんな中で三四郎の記憶に鮮烈に残った女、美禰子に、彼は振り回されるようにして惹かれていった。

そんな二人が、帰り道を共にする場面である。三四郎は、美禰子に惹かれながらもそれまで何も行動を起こせないままだった。いや、彼なりに工夫してはいたのだろうけれど、どれも決定打になることはなかった。美禰子は相変わらず曖昧な態度を取っていて、彼に気があるような、そうでないような煮え切らない返事しかない。私なら、そんな態度を取るような人は諦めてしまうだろう、と考えた。例えいくら惹かれた人でも、自分の言葉をのらりくらりとかわしてしまうような人に、いつまでも構ってはいられない。それよりも、潔く新たに惹かれる人を探した方が有意義だ。三四郎たちが生きた時代ならなおさら、早く身を固めることが求められるのだろう。事実、三四郎は母から手紙で結婚の催促を受けていた。

しかし、三四郎はただただ正面から「あなたに会いに行っただけです」と言った。他に用事があった訳ではなく、他の誰に会いに行っただけでなく、単純に美禰子に会いに行っただけと伝えた。私は、それが他のどんな趣向を凝らした言葉よりも、熱烈な愛の言葉であるように感じた。美しさを褒めるのでも、立ち居振る舞いを称えるのでもなく、会いたいから会いに行っただけと伝えるその言葉は、何にも負けない強さがあると思った。

「三四郎はこれでいえるだけの事を悉くいったつもりである。」愛を伝えた後に口下手な面を見せる三四郎に大きな好感を持てるどころも、私がこの一場面を素敵だと感じた大きな要因なのだろう。

大切な人や愛する人に、自分の素直な気持ちを伝えるというのは、思っているより照れくさくて、難しいことだ。しかし三四郎はそれに臆することなく、正面から美禰子に気持ちを伝えた。私もいつか、彼のように気持ちを伝えるときが来るのだろう。その瞬間が私に訪れた時に、私も自分の言えるだけの事を伝えられたら、と思う。例え僅かな言葉だったとしても、それは鮮烈に相手の心に突き刺さるに違いないのだ。